

学校法人 仙台育英学園 秀光中学校

二〇二二年度 入学者選考試験問題 (四教科型)

国語

(第一問～第四問)

注意

- ・試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
- ・この問題冊子は、十二ページあります。
- ・答えはすべて問題の指示にしたがって、解答用紙に記入
しなさい。

第一問 次の問いに答えなさい。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

問一 次の——線の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 背景に空が描かれている。
- ② 勇気を奮う。
- ③ 寒さで身が縮まる。

問二 次の——線のカタカナを漢字になおしなさい。

- ① カンゴ師になりたい。
- ② ぶつかるセンサーで止まった。
- ③ 鏡に顔をウツす。

問三 次の——線は同音異義語です。カタカナを漢字になおしなさい。

- ① カイカから声が聞こえる。
- ② 桜のカイカ時期が話題になる。
- ③ 文明カイカによって西洋化が進んだ。

中学校二年生の春、吉峯大吾は、共働きの両親のもとを離れ、祖母の家で暮らすことになり、東京から田舎の中学校へ転校してきた。転校先では、交通事故で両親を亡くしている宮脇悟と出会い、自然と仲良くなる。吉峯は宮脇に誘われ、二人で園芸部として活動することになった。

午後の授業中、暑いなと思って校庭にふと目をやると、地面にゆらゆらかげろうが立っていた。

① もう真夏日の予報が出ることも珍しくない季節である。

はっと気づいて席を立った。何だ何だと教師やクラスメイトがどよめく。

「吉峯、いきなりどうした!」

教師の叱責に「別に」と教室を出ようとすると、

「コラ——!」

こういうときに突っ込むのもクラスの中で宮脇の役目になっていた。

「別にじゃないだろ!」

「すぐ戻るし」

「コラッ!」

結局、教室の外まで追いかけてくるのは教師ではなく宮脇である。

「どうしたんだよ、お前また!」

「温室。朝、通風口開けるの忘れてた。こんなに気温が上

「がったら茹だっちまう」

温室ではトマトの他に野菜をいくつか育てているのと、顧問の趣味である蘭の面倒を見ている。トマトは雨に弱いので屋根付きの環境がもってこいだだが、温暖な気候の土地なので夏場は温度が上がりすぎるのが難だ。

「休み時間まで待てばいいだろ！ どうせあと三十分くらいなのに」

「だって一番暑い時間帯だし。熱抜くんなら早いほうがいいから」

「せめてトイレとかごまかして出ろよ！ 部活、禁止されても知らないぞ！」

「じゃあお前言っといて」

あーもう、と宮脇は溜息をついて教室へ戻った。

「吉峯はゲリラに襲われたそうです！」

宮脇の報告に教室がどっと沸く。持つべきものは機転とユーモアの利く友達だ。

そんなふうにして、たまに授業を混乱に陥れつつも、夏休み前にはトマトをはじめ立派な野菜が収穫できたし、顧問の蘭も煮殺さずに済んだ。

野菜を宮脇と顧問とで分けるとき、トマトを少し多目に配^{ばい}してもらった。祖母の露地^{ろじ}トマトは梅雨の長雨に打たれて出来が今ひとつだった。

「もっと取れよ。俺^{おれ}んち二人暮らしたからそんなにたくさんいらぬし」

もっとももっとも持たせようとする宮脇に吹き出した。吉峯のほうも二人暮らして、しかも一人は年寄りだ。すると宮脇は「俺と吉峯なら、吉峯のほうがいっぱい食う」と言い返した。

「おばあちゃんにうれしいのあげたくてトマトにしたんだろ」

宮脇も一学期の部活でいっぱしに知識を増やしていて、祖母のトマトの保険として温室トマトだったことは見抜かれていたらしい。② ありがたい、宮脇の分から三つ四つ多目にもらった。

「俺、夏休みに入って最初の一週間くらい家に帰ることになってるさ」

そう切り出すと宮脇は「分かった」と話が早い。

「その間は俺が温室の面倒見とくよ」

最初の収穫は終わったが、温室の野菜はまだまだ実を

「こっち来てから家帰るの初めてだよな。楽しく過ごせたらいいな」

安易に「よかったな」などと言わないところが宮脇は分かっている。両親が息子のために休みを取ったりするわけもなく、ただ一応の顔見せのために帰るようなものだ。

「まあ、向こうの友達とも会えるしな」

楽しみはせいぜいそれだけだ。③

申し訳程度にでも会社の夏休みを一日くらい子供に使ってくれたらどうだろう——などと考えると途端に帰る気力が失せるので、その命題からは目を逸らしている。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

(中略)

空港には祖母が迎えに来ていて、またライトバンをとことこ運転して家まで帰った。

「父さんと母さん、離婚するんだって」
そうかい、と祖母は答えた。

「俺、どっちについてったらいいのかな」
「どっちだって一緒だよ、大吾はうちにいたらいいんだから」
喉にぐっと大きなかたまりがつつかえた。

「大吾はこっちでいいお友達ができたし、大丈夫大丈夫」
ああそうか、と今さら気づく。

大吾はこっちでいいお友達ができてよかった、これで大丈夫——何度も祖母が安堵を確かめるように呟いていた。
祖母は最初からこうなることを知っていたのだ。孫を預かることになったときから。

喉のかたまりはぐいぐい大きくなって、家に着く頃は痛いほどになっていた。

「学校に行ってくる」

家に着くなり学校の制服に着替えた。休み中でも私服では校内に入れない。

「もう少し日が傾いてからにしたらどうだい。暑い盛りだよ」
「温室が気になるから」

止める祖母を振り切って、自転車で中学校に向かった。^⑤ペダルをぐいぐいと漕いでいるうちに、喉のかたまりはぎくしゃくと削れて胃の腑に落ちていった。

自転車置き場には宮脇の自転車が駐まっていた。

温室に行くと、一人でもけっこう楽しそうにトマトやキュウリをもいでいた。

「よう」
入り口からぼそっと声をかけると、宮脇が「あれえー!？」と

「帰ってくるの、もうちょっと先じゃなかったっけ？」
「うん、ちょっといろいろあって」

もいであった野菜を手洗い場で洗い、校舎の日陰で早く帰ってきたわけを話した。

「でもまあ、」

声を出して、まだ回ろうとする思考をねじ伏せる。
「親の離婚なんてよくある話だもんな」

軽い口調で言おうとしたが、声のしっぽがわずかに震えた。
宮脇は気づいただろうか。

「宮脇なんかもっと大変だもんな」
「人と比べるもんじゃないだろ、そういうの」

宮脇の声はまるで諭すようだ。
「俺は確かに両親が死んじゃってるけどさ、それでも吉峯は

かわいそうだと思うよ。——吉峯のほうがかわいそうだと思うよ」

「でも俺はばあちゃんもいるしさ」

「でも俺は死んだ両親に一回もめんどくさがられなかったよ」
それ以上は言い返せなかった。喉のかたまりがとうとう潰れた。

問三 ——— 線② 「ありがたく、宮脇の分から三つ四つ多目

にもらった」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 宮脇はトマトがあまり好きではないから。

イ 宮脇は食が細くたくさん食べられないから。

ウ 吉峯は祖母の露地トマトがくさってしまったのを知っていたから。

エ 吉峯は祖母に美味しいトマトを食べさせたかったから。

問四 A に入る言葉として最もふさわしいものを次の

ア～エから選び、記号で答えなさい。

A			
ア	イ	ウ	エ
結んでいる	とっている	重ねている	失っている

問五 ——— 線③ 「それ」とありますが、何を指しています

か。「～こと。」に続くように十字以内で答えなさい。

問六 ——— 線④ 「こうなること」とありますが、どうなる

ことを指していますか。「～こと。」に続くように答えなさい。

問七 ——— 線⑤ 「ペダルをぐいぐいと漕いでいるうちに、

喉のかたまりはぎくしゃくと削れて胃の腑に落ちていった」とは、吉峯のどのような様子を表していますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 宮脇に面倒を任せていた温室のことが気がかりで、早く確認したいという気持ちをおさえこもうとしている様子。

イ 祖母が「大吾はうちにいたらいいんだから」と言ってくれたことに対して、感謝の気持ちをかみしめている様子。

ウ 祖母の制止を振り切って家を出てしまったことに対して、申し訳ないという気持ちが次第に大きくなっていく様子。

エ 両親が離婚することについて、自分の複雑な気持ちを表に出さないよう、無理に飲みこもうとしている様子。

問八 B に入る言葉として最もふさわしいものを次の

ア～エから選び、記号で答えなさい。

B			
ア	イ	ウ	エ
くぐもった	すっとんきょうな	歌うような	とげとげしい

問九

——線⑥「宮脇がトマトを差し出した」のはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 両親と祖母から冷たくあしらわれ、食欲を失っている吉峯がかわいそうだと思い、おいしいトマトを食べさせたかったから。
- イ 両親が離婚するという事実を受け入れられず、荒れている吉峯に、自分の作ったトマトをしまったかったから。
- ウ 両親のどちらからも選ばないでほしいと期待されている吉峯がかわいそうだと思い、少しでも元気づけてあげたかったから。
- エ 両親が離婚することの意味を理解できず、のんきに過ごしている吉峯に、現実のきびしさを教えてあげようと思ったから。

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

I

就活している学生が「これからは最も重視されるのはコミュニケーション能力だそうです」と言うので、「うん、そうだね」と頷きながらも、この子は「コミュニケーション能力」ということの意味をどう考えているのかなと、ちょっと不安になってきました。きっとこの学生は、「自分の意見をはっきり言う」とか「目をきらきらさせて人の話を聞く」とか、そういう事態をぼんやり想像しているのだろうと思います。もちろん、それで間違っているわけではありません。でも、どうしたら「そういうこと」が可能になるかについては、いささか込み入った話になります。

例えば、どれほど「はっきり」発語しても、まったく言葉が人に伝わらないときがあります。個人的な話をします。

何年か前にフランスの地方都市に仕事でしばらく滞在したときの話です。スーパーに行ってマグカップを買おうと、レジに行ったらレジの女性店員に何か訊ねられました。なんとなく聞き覚えのある単語なのですが、意味がわかりません。

「え？ 何です？」と聞き返してみたが、それでもわからない。二度三度と「え？」を繰り返しているうちに店員は諦めたらしく、肩をそびやかしてマグカップを包み始めました。どうも気持ちが片づかないので、カップを手渡されたあとに、

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

レジの上に身を乗り出して、ひとことひとことゆっくり噛みしめるように、「先ほど、僕に何を訊いたのですか？」と問いかけました。すると店員もゆっくり噛みしめるように、「郵便番号を訊いたのだ」と答えた。「なぜ、郵便番号を？」と重ねて訊くと、「どの地域の人がどんな商品を買っているのか、データを取っているのだ」と教えてくれた。

郵便番号 (code postal) というのは基本的な生活単語です。もちろん僕も知っていました。でも、それがスーパールのレジでマグカップを買うときに訊かれると、聞き取ることができない。ふつうレジで訊かれるはずの質問リストの中に、その単語が存在しないからです。

これは①コミュニケーション不調の典型的な一例です。一方において意味が熟知されたこと、当然相手も理解してよいはずのことを口跡明瞭に発語しても、相手が聞き取ってくれないことがある。文脈が見えないからです。「スーパールのレジでは買い物に際して顧客情報を取ることがある」という商習慣を知っていれば、文脈がわかる。知らなければ、わからない。このときに肩をすくめた女性店員に向かって、僕がレジに身を乗り出して、ひとことひとこと区切って発語したことで、意味のわからない単語の意味が明かされました。これが「コミュニケーション能力」②です。そういうことを顧客はふつう、レジのカウンターではしないからです。

店員は僕がフランスの商習慣になじみのない外国人であることを察知して、なぜマグカップを買うのに郵便番号を訊く

のか、その理由を教えてくださいました。そういうことはふつうレジのカウンターで店員はしてくれませんか（うるさそうに肩をすくめて「バカか、こいつ」という顔をしておしまい）。僕は、彼女が僕のためにこの説明の労を取ってくれたことを多①とします。これは彼女の側の「コミュニケーション能力」です。

つまり、コミュニケーション能力とは、コミュニケーションを円滑に進める力ではなく、コミュニケーションが不調に陥ったときに、そこから抜け出すための能力だということです。今の例でおわかり頂けるように、それは「ふつうはしないことを、あえてする」というかたちで発動します。買い物客はふつうレジに身を乗り出して、店員の発言を確認しません。レジの女性店員たちはふつう、フランスのローカルな商習慣を外国人に説明しません。僕たちは二人ともそれぞれが「ふつうはしないこと」をした。それによって一度途絶したコミュニケーションの回路は回復しました。こういうのがコミュニケーション能力の一つの発現形態だと、僕は思います。「ふつうはしないこと」は、「ふつうはしないこと」という定義から明らかのように、マニュアル化することができません。それは臨機応変に、即興で、その場の特殊事情を勘案して、自己責任で、適宜コードを破ることだからです。③コードを破る仕方はコード化できない。当たり前です。

大学を辞めたのもうしなくてよくなって、ほっとしてありますが、センター入試の試験監督かんとくという仕事が大学教員にはあります。一センチほどの厚さのマニユアルを渡されて、それを熟読し、そこに書かれている通りに入試業務を進行するという、悪夢のような仕事です。僕は退職前には入試部長という仕事をしていましたが、試験前に読むことを求められた「責任者用マニユアル」は全六冊、片手では持てない厚さと重さでした。

その中で、年々頁数ぺいすうが増してゆくのが「トラブル対応集」でした。「試験中奇声きせいを発する受験生」や『必勝』はちまきをしている受験生」や「強烈な香水をつけている受験生」をどう処遇しよぐうすべきかが、そこには書いてありました。前年から増えた増補分は、おそらく「前年にどこかの会場であった実例」でしょう。でも、このペースで毎年改定を続けてゆくと、やがて「トラブル対応集」だけで数百頁の読み物となってしまうことに気づいた人たちがいて、「センター入試はもうやめよう」ということになった。制度廃絶はいぜつの一因は、監督マニユアルの無限増殖にあったのだらうと、僕は推察すいさしております。

「ありうるすべての事態を網羅もうら的に列挙し、それについての個別の対応を精密せいみつにマニユアル化すべきだ」というのは、^④現代社会に取り憑ついた病です。それまたいへん重篤じゆうとくな病です。

まことに愚かなことだと僕は思います。

マニユアル信奉者は、マニユアルは精緻せいせい化するほどに浩瀚こうかんな書物となり、あるレベルを超こえるともはや「取り扱い説明書」の用をなさなくなるという、当たり前前のことに気づいていません。

でも、もっと重大なのは、マニユアルを精緻化することで、僕たちの社会は「どうしてよいかわからないときに、適切にふるまう」という、人間が生き延びるために最も必要な力を傷つけ続けているということなのです。そのことの危険性に誰も気づいていない。

もう一度繰り返しますが、コミュニケーション能力とは、この「どうしてよいかわからないときに、どうしたらよいか」がわかる能力能力の一種です。最も適切なやり方で、「コード」にないことをする「コードを破る」能力です。

僕たちが生きている間に遭遇そうぐうする決定的局面は、すべて「どうしてよいかわからない」状況です。結婚相手を決めるときも、就職先を決めるときも、乗った飛行機がハイジャックされたときも、神戸にゴジラが上陸したときも、僕たちは「こうすれば正解」ということをあらかじめ知らされていません。どうしてよいかわからないけれど、決断は下さなければならぬ。人生の岐路きろというものは、だいたい「そういうもの」です。

わが国のエリート層を形成する受験秀才たちは、あらかじめ

め問いと答えがセットになっているものを丸暗記して、それを出力する仕事には長けていますが、正解が示されていない問いの前で「臨機応変に、自己責任で判断する」訓練は受けていません。

A 誤答を病的に恐れるあまり、「想定外の事態」に遭遇すると、「何もしないでフリーズする」ほうを選ぶ。彼らにとって「回答保留」は、「誤答」よりましなのです。

B、ライオンが襲ってきたときに「どちらに逃げてよいか、正解が予示されていないから」という理由でその場に立ち尽くすシマウマは、たいてい最初に捕食されま

C、秀才たちに制度設計を委ねると、その社会が危機を生き延びる可能性は必然的に遞減することになります。

コミュニケーションがうまくゆかないという人たちは、ほとんど例外なく、「ルールを破る」ことができない人です。立場が異なる者同士が互いにわかり合えずにいるのは、それぞれがおのれの「立場」から踏み出さないからです。自分の「立場」が規定する語り口やロジックに絡め取られているからです。

III

コミュニケーション失調からの回復のいちばん基本的な方法は、いったん口をつぐむこと、いったん自分の立場を「かっこにいれる」ことです。「あなたは何が言いたいのか、私にはわかりません。そこで、しばらく私のほうは黙って耳を傾けることにしますから、私にもわかるように説明してく

ださい」。そうやって相手に発言の優先権を譲るのが対話というマナーです。

でも、この対話というマナーは、今の日本社会ではもうほとんど採択されていません。今の日本でのコミュニケーションの基本的なマナーは、「自分の言いたいことだけを大声でがなり立て、相手を黙らせること」だからです。相手に「私を説得するチャンス」を与える人間より、相手に何も言わせない人間のほうが社会的に高い評価を得ている。そんな社会でコミュニケーション能力が育つはずがありません。

「相手に私を説得するチャンスを与える」というのは、コミュニケーションが成り立つかどうかを決する死活的な条件です。それは「あなたの言い分が正しいのか、私の言い分が正しいのか、しばらく判断をペンディングする」ということを意味するからです。

それはボクシングの世界タイトルマッチで、試合の前にチャンピオンベルトを返還して、それをどちらにも属さない中立的などころに保管するのに似ています。真理がいずれにあるのか、それについては対話が終わるまで未決にしておく。いずれに理があるのかを、しばらく宙づりにする。これが対話です。論争とはそこが違います。論争というのはチャンピオンベルトを巻いたもの同士が殴り合って、相手のベルトを剥ぎ取ろうとすることだからです。

対話において、真理は仮説的にはあれ、未決状態に置かれねばなりません。そうしないと説得という手続きには入れ

ない。説得というのは、相手の知性を信頼しんらいすることです。両者がともに認める前提から出発し、両者がともに認める論理に沿って話を進めれば、いずれ私たちは同じ結論にたどりつくはずだ、そう思わなければ人は「説得」することはできません。説得するためには、対面している相手の知性に対する敬意を、どんなことがあっても手放してはならない。そして、先ほどから述べている「コードを破る」というふるまいは、相手の知性に対して敬意を持つものによってしか担われられないのです。

コミュニケーションの失調を回復するためには、^⑤自分の立場を離れて、身を乗り出す他にありません。僕はスーパーのレジで、文字通りつま先立ちになって、カウンターのの上に身を乗り出して話しかけました。立場を離れるというのはそういうことです。相手に近づく。相手の息がかかり、体温が感じられるところまで近づく。相手の懐なつかひに飛び込む。「信」と言ってもよいし、「誠」と言ってもよい。それが相手の知性に対する敬意の表現であることが伝わるなら、行き詰づまっていたコミュニケーションは、そこで息を吹き返す可能性があります。

(内田 樹 「街場の共同体論」)

(問題の都合上本文の一部を省略しました。)

注1 多とする……高く評価する。

注2 勘案……色々な事情を考え合わせる。考えをめぐらすこと。

注3 精緻……きわめてくわしく、細かいこと。

注4 浩瀚……書物などの量が多い様子。

注5 遞減……だんだんと減ること。

注6 ペンディング……保留すること。

問一 —— 線①について、筆者がフランスのスーパーで体験した「コミュニケーション不調」はなぜ起こったのですか。「〽から。」に続くよう、本文中から七字で書き抜

きなさい。

問二 —— 線②「コミュニケーション能力」とはどのような能力ですか。筆者の考えを本文中から三十五字以内で

書き抜きなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問三 ——— 線③「コードを破る仕方はコード化できない。」

のはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 話の流れを想像して自己責任で行動しないといけないから。

イ コミュニケーションには相手の話をよく聞く力が
必要だから。

ウ 一度途絶えたコミュニケーションの回路はなかなか回復しないから。

エ 「ふつうはしないこと」には自己責任でとっさに判断しないといけないから。

問四 ——— 線④について、「マニュアル化」が「現代社会

に取り憑いた病」だと筆者が言うのはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア マニュアルが全て正しいと思いついてしまおうと何か意見を言われたときに対立してしまうから。

イ 全てマニュアル化すると予期しないことが起こった時にどうしたら良いか分からなくなるから。

ウ 全てがマニュアル化されると一つ一つ確認してか
らでないと言動できなくなってしまうから。

エ マニュアルが多くなりすぎると全てを覚えきれず

にかえってミスが増えてしまうから。

オ マニュアルが詳しくなりすぎると、みんな読む気をなくしてしまうから。

問五 A～Cに当てはまる語としてふさわしいものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア でも イ むしろ ウ たとえ
エ ですから

問六 ——— 線⑤「自分の立場を離れて、身を乗り出す」と

は、コミュニケーションにおいてどのような気持ちの表れですか。「の表れ」に続くよう、本文中から十一文字で書き抜きなさい。

問七 I～IIIにはこの文章の小見出しが入ります。

それぞれの部分にふさわしい小見出しを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ふつうはしないことを、あえてする

イ マニュアルにあること以外の言葉は嫌われる

ウ 相手の体温を感じるところまで近づくこと

エ マニュアルが生き抜き力を奪う

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

歌人の^①俵万智^{たちまち}さんにこんな作品がある。へ出ていけと思っ
たこともあったっけ行ってしまった櫛^{けし}のむこう^A。教え子が
巣立^{すた}った。時にはぶつかることもあったけれど、先生の感概^{かんがい}
がにじむ。俵さんはかつて高校の教壇^{きょうだん}に立っていた。

学校もコロナに翻弄^{ほんろう}された1年だった。部活動ができない
期間も長かった。その中で生徒を支えるために、やりとりに工^B
夫^こを凝^こらした先生は多い。SNS、手紙、YouTube……。
そんな姿を生徒はしっかり見ていたはずだ。

コロナ禍^かでなくとも、生徒の心をつかむのは難しい。短歌
を「武器」にする先生もいる。千葉聡さん。神奈川県の高
校教師で歌人である。著書「短歌は最強アイテム」に学園生活
が生き生きと描かれている。

国語科準備室の前にある小さな黒板で、お薦^{すす}めの一首を
日々紹介した。最初から生徒の反応があったわけではない。
時間をかけて一人一人と向き合ううちに、気持ちを通じるよ
うになった。紹介した短歌は小声で彼らに話しかけるような
応援歌^{おうえん}に聞こえる。へ「まだ」^②と「もう」^③点滅^{てんめつ}している信号
に走れ私の青春^④（松村正直）。

青春は理屈^{りくつ}では語れない。高校では来春から、実用的な文
章を重視した「論理国語」の授業が始まる。文学軽視になる
との懸念^{けねん}が根強い。青春^③期にはむしろ文学が「実用的」なの

だが。

コロナ禍の中で迎えた惜別^{せきべつ}の春。先生たちは卒業生にどん
な言葉を贈^{おく}るのだろう。へフオルテとは遠く離れてゆく友に
「またね」と叫^{さけ}ぶくらしいの強さ（千葉聡）。

（毎日新聞「余録」二〇二一年三月二十七日掲載）

問一 線①「俵万智」の短歌集としてふさわしいもの

を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 『みだれ髪』
- イ 『ハッピーアイスクリーム』
- ウ 『サラダ記念日』
- エ 『プライベート』

問二 線A「教え子が巣立った。」とはここではどの

ような意味で使われていますか。漢字二字で答えなさい。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

問三

——線Bについて「工夫を凝らす」の意味としてふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 意識を一か所に集中させる
- イ あれこれと意思を巡らせ試してみる
- ウ 多くの人と協力して取り組む
- エ 不意に良いアイデアを思いつく

問四

——線②「『まだ』と『もう』点滅している信号に走れ私の中の青春」という短歌について説明したものとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 卒業を間近にひかえてこれからの人生を思いきり楽しんでやろうという決意が表現されている。
- イ 人生に対する焦りと楽観的な感情がありつつも前に進んでいこうという心情が表現されている。
- ウ 受験に対して不安を抱えながらも立ち止まっている暇はないと自分をはげます心情が表現されている。
- エ 漠然とした焦りと不安がある中で毎日を過ごさなければならぬつらさが表現されている。

問五

——線③「青春期にはむしろ文学が『実用的』のだが」と筆者が述べていることについて、次の問いに答えなさい。

(1) 筆者は「青春」のことをどのように考えていますか。筆者の考えを述べている一文を本文中から十二文字で書き抜きなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

(2) 筆者は青春期には文学が「実用的」と考えていますが、あなたはどのように考えますか。「青春」「理屈」「文学」という語句をもちいてあなたの考えを書きなさい。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

